

多様化する文化財の活用方法

—飛鳥資料館での実践例—

1 はじめに

近年、博物館や美術館では、文化財の保存とともに、活用方法が多様化している。本稿では、来館者が文化財をより身近に感じられるように、2017年度に飛鳥資料館で重点的に取り組んだことについて報告する。

2 ソーシャルメディアによる情報発信

博物館・美術館のホームページ（以下、HP）やSNSなどは、館自らが情報を発信し、一般市民とつながる場として重要な役割を果たしている。これらソーシャルメディアを通じて発信する情報は、特別展や企画展など展示に関わる内容、休館や臨時のお知らせ、日々のようすを記したブログなど多岐にわたる。飛鳥資料館では、これらの情報をよりわかりやすく、多くの人に届けられるように、HPのリニューアルとFacebookの活用により、情報発信の強化をおこなった。

飛鳥資料館HPのリニューアル 飛鳥資料館のHPは2005年に開設され、その後何度かリニューアルをおこなってきた。今回のリニューアルにあたっては、各ページのアクセス数や来館者アンケートを解析した結果、館への交通手段や入館料など、来館時に必要となる基本的な情報の需要が高いにも関わらず、それらの情報が見つげにくいこと、展示に関する情報が少ないということがわかった。そのため、以下の2点を重点的に強化し、親しみやすく、使いやすいレイアウトのHPになるよう試みた。

①必要な情報へのアクセス性の向上

②来館時に必要となる情報やコンテンツの充実

①については、どの世代にもわかりやすい文字のサイズや色、メニューの配置などを特に意識した。また、一般の人から電話での問い合わせがあったときに、電話口の説明でも見つけやすいページ構成を心掛けた。②の展示に関する情報としては、庭園や各展示室・展示品のようす、過去の展覧会一覧、学び、パンフレット類のダウンロードページなど、飛鳥資料館の魅力が伝わる情報を大幅に増やした。

新規追加した過去の展示一覧ページでは、過去約40年



図35 高松塚古墳の原寸大の石室模型

分の特別展・企画展のポスター（またはチラシ）とその開催期間などの情報を年ごとに分けて紹介した。これにより、今まで公開していなかった情報を新たに発信でき、飛鳥資料館の歴史を紹介するページとなった。

同じく新規追加した「学び」に関するページでは、飛鳥資料館に来館して学べる内容を紹介した。学校団体の先生が事前に来館計画を立てるのに活用したり、歴史に興味のある人が情報収集をしたりと、来館者にとって便利なページになるよう試みた。

Facebookでの動画コンテンツの強化 昨年度に引き続き、Facebookでの情報発信にも力を入れた。今年度の投稿は97件で、フォロワーは2016年度末の920人から517人増加して1,437人になった（2018年3月31日現在）。今年度の新たな試みとしては、映像やタイムラプス動画などエンターテインメント性の高い投稿の数を増やしたことが挙げられる。展覧会に関する情報やお知らせなどは、情報の受け取り手が繰り返し楽しめる要素が少ない。しかし、映像コンテンツを併用することで、より幅広い情報を発信できる。そこで、展覧会ができるまでの過程や全体の作業の流れをタイムラプス動画で撮影し、公開した。一般の人は、展覧会がどのように出来上がるのかという普段見る機会のない映像であったため、今までに公開した動画よりも多い再生回数を記録した。

3 複製品による文化財の活用

複製品や復元品・模型などの効果的な活用は、文化財の保存と活用を両立していくために重要な取り組みである。2017年度には、これらの資料を生かして、展示品を「見学する」以上の体験を提供する取り組みをおこなった。

高松塚古墳石室の原寸大模型による復元 秋期特別展「高松塚古墳を掘る-解明された築造方法-」では、展示会場に原寸大の石室模型を展示した（図35）。高松塚古墳の石室は、石室の解体によって、現在は組みあがった姿を見ることができない。しかし、発掘調査成果から原寸



図36 「つくろう!!ミニチュア玉枕」の様子

大の石室を再現したことにより、写真や図面だけでは伝わりにくい石室自体の大きさや、壁画のサイズなどを体感できるようになった。

会場では、来館者が石室内に入れるようにしたため、来館者は被葬者気分を味わって寝転んでみたり、壁画が描かれていた高さを確認したりと、視覚だけでなく、体で石室を感じる機会の提供につながった。このように復元品などを効果的に活用することで、実物を見学するだけでは得られない経験が生まれ、新しい学びの視点を提供できる可能性を広げられるといえるだろう。

イベント「つくろう!!ミニチュア玉枕」の開催 8月9、10日に帝塚山大学の牟田口章人氏と連携して、阿武山古墳（大阪府高槻市）から出土した玉枕のミニチュアを制作するイベントを開催した（図36）。このイベントでは、「工作体験」が、飛鳥時代や歴史の「学び」につながるように意識した。イベントの冒頭には、牟田口氏が阿武山古墳や玉枕について解説する玉枕講座を実施。また、牟田口氏の協力のもと、発泡スチロールビーズ製のほぼ実物大の模型や、ミニチュア玉枕の完成品を、参加者が手に取れるコーナーも会場内に設けた。玉枕の歴史を学び、実物大の復元品にふれることで、ミニチュア玉枕づくりが、飛鳥時代の「ものづくり」につながることを強調した。

また、玉枕のつくり方の説明書や、会場の雰囲気づくり、スタッフの体制にも工夫をした。説明書には一目でビーズと糸の通し方がわかるように、カラフルな模式図や写真を多用した。色づかいや文字のデザインも、絵本や子供向けの本を参考に、子供達のワクワク感を引き出しつつも、飛鳥の歴史や玉枕のイメージを損なわないように意識した。スタッフの体制については、1～2テーブルにつき1人が、参加者のサポートにあたった。「参加者が話しかけやすい雰囲気」「細かな目配り」を徹底するようにスタッフ間で意識を共有し、制作にいきづまる参加者が出ないように注意した。こうした工夫により、小さな子供から大人まで、参加者全員が、時間内に



図37 リニューアルした入館チケット

ミニチュア玉枕を完成させることができた。

また、本イベントの開催にあたっては、若年層をターゲットに、子供の目を引くデザインを意識したチラシやHPを作成し、近隣の小学校へ重点的に広報活動をおこなった。これにより、応募者が200名以上にのぼり、急遽、開催日を2回に増やした。アンケート結果からみても飛鳥資料館を知らなかった参加者が48%、今後も同様のイベントに参加したい参加者が95%に上るなど、大きな反響が得られた。

入館チケットのリニューアル 2017年度から高松塚古墳出土の唐草走獣文透彫金具を入館チケットのデザインに採用した（図37）。大きな展示品に紛れて見落とされがちな、唐草走獣文透彫金具の細部装飾の美しさを、入館チケットという媒体を通して伝えるという試みである。

チケットは、唐草走獣文透彫金具の形に型抜きし、原寸の約1.5倍のサイズにすることで、細部まで観察できるようにした。実物との大きさをあえて変えることで、透彫金具の緻密な意匠や、実物資料からの感動を楽しんでもらう狙いがある。また、このチケットは本のしおりとしても使えるサイズにこだわった。チケットをしおりとして再利用することで、帰宅後も飛鳥資料館や展示品について思い出し、文化財や飛鳥時代について親しみきっかけとなるように試みた。

4 おわりに

博物館で展示・収蔵している資料について、来館者の興味を促し、文化財を守り伝える重要性を知ってもらうためには、文化財を保存する一方で、効果的に活用していくことが重要である。実物資料の価値を損なわない文化財の活用手法は、今後ますます多様化が求められるだろう。今後も、情報発信と複製品・復元品の活用にとどまらず、幅広い年代の人に歴史や文化財を大切に思う気持ちを育てていくことを意識しつつ、展示活動に取り組みたい。

（小沼美結・西田紀子）